

名作歳時記

巖谷大四



名作歳時記

巖谷大四

丸ノ内出版

名作歳時記 ©

昭和五十年七月二十日印刷
昭和五十年七月三十日発行

著者 巖谷大四

東京都杉並区上荻三丁目二一〇
(電) 03 三九九一 三三三二

発行 丸ノ内出版

東京都千代田区丸の内ビル五階
(電) 03 二〇一 二八四三
振替 東京六十四〇二六七

印刷／堀内印刷
製本／中條製本

定価 一、二〇〇円

目次

一月	1
正月／雑煮	2
どんど焼き／成人の日	5
雪／スキー	8
みかん	11
豆撒き／凧	14
二月	17
初午／梅	18
実朝忌／椿	22

春の雪／二・二六事件……………二四

三月……………二七

雛祭／桃……………二六

東京大空襲……………三一

お水取り／春の匂い……………三四

春の彼岸／草餅……………三七

菜の花／雲雀……………四〇

四月……………四三

新生／三四郎池……………四四

桜／お花見……………四七

雪国の春／ツバメ……………五一

晩春の草原／バラ……………五五



五月……………五九

端午の節句／菖蒲湯……………六〇

藤……………六四

花たちばな／茶……………六六

青葉若葉／柳……………七一

小鳥／巢立ち……………七四

六月……………七七

鑑真忌／あじさい……………七六

桜桃忌／サクランボ……………八一

梅雨／卯の花……………八四

五月雨／鮎……………八七

七月……………九一

朝顔市／ほおずき市……………九三

祇園祭／うちわ……………九五

河童忌／恐山地蔵会……………九六

高原の夏／海の夏……………一〇一

八月……………一〇五

広島・長崎／原爆の日……………一〇六

炎暑／蟬……………一〇九

終戦の日……………一一二

虫の声／夏も終わり……………一二六

九月……………一二九

関東大震災記念日……………一三〇

目次

老人の秋／若者の秋……………一三三
台風一過／秋晴れ……………一三七
秋の彼岸／富士の初雪……………一三一
中秋名月／こおろぎ……………一三四

十月……………一三七

秋の匂い／松茸／稻刈り……………一三六
お会式／鉄道記念日……………一四一
招魂祭／べったらし……………一四四
鞍馬の火祭／紅葉……………一四八

十一月……………一五一

晩秋／落葉……………一五二
柿／もず……………一五五
お酉さま……………一五八

冬の花／冬の蠅 ……………一六二

十二月……………一六五

師走／鍋料理 ……………一六六

寒風／雑木林 ……………一六九

冬げしき／りんご ……………一七三

ゆず湯／年の暮れ ……………一七五

大晦日／除夜の鐘 ……………一七六

あとがき ……………一八一

装幀・巖谷純介

本文イラスト・三井永一

一月



正月／雑煮

□ 田辺聖子『子供と正月』

私の父小波は祝い事が好きで、とくに正月は特別に凝った門松を立て、雑煮茶わんもめいめいの十二支（子ならネズミ、卯ならウサギ）の絵の描いてある茶わんで毎年鴨雑煮をたべ、獅子や万歳を家に呼び入れて祝った。隣り近所十数軒の名刺くばりもさせられた。ただしこれは、四十年前も前の話である。

「……私は毎年同じような文句だから、今年は一つ、気の利いた文句で修飾しようと思つて、さかいのガラス障子をあけながら、すまして『がらがらとあけて、おめでとございます』といったらみんな引っくり返って笑つて、私はしばし大得意であつた。たぶん小学三、四年のころだろう。しかし、一夜明けると、肅然と引きしまる表情の町の有様は、まさしく『がらがらとあける』感じがあつたのである。」

これは田辺聖子さんの『子供と正月』（昭和四十八年）という随筆のひとつだが、私にもそんな思い出がある。元日の朝は奇妙にしーんと静まりかえつて、新しい年を迎えたという思いで、今でも心あらたまる。しかしこのごろは、わずらわしい都会を逃

れて、故里や温泉場、または京都、奈良のような古都で除夜の鐘を聞き、新しい年を迎える人が多くなった。今年もそれで駅頭や空港がごったがえしたようである。

◎ 川端康成『正月三ヶ日』

川端康成の戦前の短篇に『正月三ヶ日』（昭和十五年）という秀作がある。二十年来の友人が、それぞれ細君を連れて一緒に熱海から伊豆をまわって正月三が日を送る話である。予約もせずに行ったので、客引きの案内で粗末な宿に泊まらされるのだが、それでも細君たちはどこか浮き浮きと楽しそうなのである。

その三日の間に、お互いの心にちょっとしたわだかまりのある一方の夫婦が、口喧嘩ばかりしながらも仲の好いもう片方の夫婦に刺戟されて、段々よりもどり新しい愛情を燃やすようになる。その過程が、巧みな心理描写でつづられていて、味わい深い。

西伊豆土肥温泉の安宿で、男たちが湯に入ると「風邪引いちゃうわ。私達も入りましょうよ」と、二人の細君も「羞恥心を道中に置き忘れたように」亭主たちと一緒に湯に入る情景がある。

「町子は温い湯に腰を入れると、寒かったせいか、涙が出て来そうで眼をつぶった。飯田は友枝のいいからだに驚いて、うつ向いてしまった。

それを見ると、町子は身を縮めて、なにか激しい思いがこみ上げて来た。

友枝は楽しそうに湯のなかへ足をのばした。

その夜は細君達もおしゃべりをしなかった。

松本はすぐいびきをかいだ。四人の親しみが増したような、平和で深い眠りであった。」

ほのぼのとしたひとこまである。

回 夏目漱石『吾輩は猫である』

夏目漱石の名作『吾輩は猫である』（明治三十八年）の第二章は、元旦から十日までの情景が書いてあって、その二日目に「吾輩」が、主人の残したわんの底の雑煮餅に噛みついて、あわてふためく場面がある。

「餅は魔物だなと疝^{かん}づいた時は既に遅かった。沼へでも落ちた人が足を抜かうと焦慮^{せう}る度^どにぶくぶく深く深く沈む様に、噛めば噛む程口が重くなる、歯が動かなくなる。歯答^かへはあるが、歯答^かへがある丈^{だけ}でどうしても始末をつける事が出来ない。美学者迷亭先生^かが嘗^{かつ}て吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといった事があるが、成程うまい事をいったものだ。此餅^こも主人と同じ様にどうしても割り切れない。」

「吾輩」が主人の雑煮餅を失敬しようとして、その無気味なしろものに仰天する様子が眼に浮かぶようである。

近ごろ、電気餅つき（？）機というのが出来たのをテレビのCMで見たが、あじけないことになったものである。

どんど焼き／成人の日

◎ 井上 靖 『白い街道』

「毎年一月十四日の朝、この部落では、子供たちが部落中のお飾りを田圃で焼く慣わしだった。そのお飾りは七日に、子供たちが部落の家を一軒一軒廻って集めて来て、田圃の一カ所に積み重ね、それを竹で編んだすだれで覆ってあった。子供たちにとっては、そのお飾りを焼く『どんどん焼き』は楽しい行事であったが、どこかその楽しさの中には正月と別れる淋しさも混じっていた。子供たちは、お飾りを焼く火で雌竹の先に差した餅を焼いた。」

これは井上靖の短篇『白い街道』（昭和三十年）に出てくるひとこまである。作者自身の少年のころの思い出をつづったもので、温暖の地伊豆湯ヶ島で、田舎の子供らしく純朴な生活を送った作者の、青春に目覚めかけたころの甘ずっぱい匂いのただよう、さわやかな作品である。

「どんどん焼き」というのは、十四日から十六日までの「小正月」の火祭り行事で、地方によっては「どんど焼き」（この方が多いようだ）「どんど正月」とも言う。注連縄

や松飾りを焼く行事で、昔は村々の大がかりな集団的な行事であった。山からクリやナラの木を切ってきて来て、それに松や注連飾りを結わえつけて焼いたものであった。小屋を作って焼く地方もあり、所によっては、子供たちがその中で正月中、十五日まで神棚を設けて寝食する習慣もあるという。

私の子供のころにも、集団ではないけれども、自分の家の注連縄や松飾りなどを庭にあつめて焼いたものである。そしてそれは、私には「正月と別れる淋しさ」の方が強かったように思う。門松などがとりはられ、そのあとの穴ぼこに、松の葉が申し訳のように残っているのを見るのは寂しかった。

小正月の「十五日」は、戦後になって、国民の祝日「成人の日」と定められた。満二十歳に達し、成人になった男女を祝う日となった。それは古来、小正月に「成年戒」「成女戒」を意味する青少年の行事が多く行なわれたことに由来するということだ。日本全国の都市、町村で「成人の日」を祝う会が催され、成人が集まっているが、どうも振袖の女の子の方が多いようである。

◎ 三島由紀夫『永すぎた春』

先年壮烈な割腹自刃をとげた三島由紀夫の長篇小説『永すぎた春』（昭和三十一年）は「成人の日」に婚約をかわした若い男女が、男の父に、一年三ヵ月後大学を卒業するまで結婚式をあげることまかりならぬという条件をつけられる。ところがその間に双方にさまざまなトラブルが起こり「幸福というものは、どうしてこんなに不安なの

だろう」と、お互いにやきもきした末、予定より早く、クリスマス前に無事ゴールインするという話だが、その「やきもき」が読者を「はらはら」させて人気を呼び、「永すぎた春」という流行語まで生んだ。

婚約成立の晩、男の方の両親と仲人が、女の両親を銀座の料亭に招き、夜更けて二人がようやく解放されて街を歩く場面がある。

「街にはまだ門松が、松の内をすぎたのに、そこかしこに、ショウ・ウインドウの螢光燈のあかりを受けて、立っていた。色とりどりの小間物をあきなう細い店は、女客に賑わっていたが、その入口をとおるたびに繭玉が女客の髪に引っかけりそうでいて、あやういところ引っかけられないのを、二人は立止って、一寸感心して眺めた。それでも繭玉のあいだの小判は、夜風にたえずキラキラと裏表をかえして、揺れていた。」

いかにも東京の繁華街の小正月らしい情景が、短文の中に鮮やかに描き出されている。

今年も繭玉の街は、振袖姿のあでやかな女の子たちで賑わうに違いない。

雪／スキー

◎三浦哲郎『忍ぶ川』

今年の冬はひとしお寒さが身にしみる。日本海側は豪雪だそうだ。

しかし、あたり一面、白一色に覆われた雪景色は、いかにも清冽で、静謐で、心を濯⁺がれる思いがする。埃という埃を雪がすっかり漉してしまったように、空気がこの上もない清らかさで雪の上に静まりかえっている感じである。

三浦哲郎の名作『忍ぶ川』（昭和三十五年）は、北国からはるばる上京してW大に入学した「私」が、同郷の先輩の卒業送別会に入った「忍ぶ川」という小料理店の志乃という娘に心を惹かれ、やがて二人は、娘の父の死の床で結婚を誓い、「私」が志乃を連れて、故郷の雪の深い月の美しい夜に、最初の一夜を明かすまでの話だが、その初夜の情景が実に美しい。

「雪国の夜は地の底のような静けさであった。その静けさの果てから、さえた鈴の音がきこえそれがゆっくり高まった。

『なんの鈴？』志乃が訊いた。